

ろいろと啓蒙運動が行われた。二十三年九月二十九日、信洋丸に乗船したときには、もう初雪がちらちらと舞っていた。日本海の荒波に酔いながら舞鶴へ向かう、日本の島々が見えたときはみんな甲板に上がり、やっと帰れた感激に涙を流しうれしさにひたった。

シベリアでの大隊本部要員は、大隊長松本鉄之助少佐、兵庫県出身（当時五十二歳くらい）、副官杉野雄二中尉、長野県出身、通訳渡辺伍長、茨城県出身、伝令・当番宇藤本三二等兵、熊本県阿蘇郡色見村出身。

私の記憶しているソ連より支給された糧秣の一人当たりの定量は一日パン三百五十グラム、穀物類四百五十グラム、魚肉類二十五グラム、油十グラム、砂糖十八グラム、タバコ五グラム、とはなっているが受領は不正確であった。

シベリア抑留記憶を追って

福井県 尾上敏雄

私は昭和二十年二月、中部第三十六部隊より新設部隊要員として、満州国黒河省孫呉に到着、部隊編成の諸準備に従事、同四月五日新設の第一〇七師団第二七〇連隊を編成、同日軍旗拝受、同連隊の通信中隊内務係として服務、同年八月一日遼陽教育隊に学生として入隊、同八月八日、日ソ開戦のため同月十三日学校解散、原隊復帰のためハリピン市まで到着しましたが、原隊と連絡が取れないので、同僚とともに新編の混成第一三一旅団司令部に仮配属、ハリピン市内の防衛に従事、当時ハリピン日満会館に旅団司令部があり（旅団長井部信時少将）司令部の通信業務に従事しておりましたが、必勝を期した日中戦争も八月十五日正午をもって敗戦となった。思えば二十年二月渡満して六か月有余で悲しい敗戦となった。

日本へ帰れることを信じて一週間、日満会館で過ごした。終戦二日間に同僚の一人が敗戦を悲しんで自殺した。多分八月二十三日ころかと思うが。ハルビン郊外セイコウシの日本軍隊の兵舎に移動、この地で武装解除され約一か月を過ごす。この間にソ連軍の指導により一個大隊千人単位に編成された。私は第四軍の所屬で准士官、下士官ばかりで編成された第三〇大隊で、当時の大隊長は椎名大尉でした。

当地から毎日一個大隊ずつ出発した。日時は記憶がはっきりしない、どこへ行くのか出発の日が来た。毎日鉄道沿線を行軍ばかり、夜は野宿で昼は行軍ばかり、約二週間ばかり歩いたと思う。持っていた少々乾めんパンで空腹をしのぐばかりであった。途中で山に警備駐屯していた日本軍隊で終戦を知らない兵隊が多かったことを思う。日本の一般在留法人もともに歩いた。中には小さい子供の手を引き、背中には乳飲み子をおんぶして、食べるものもなく、歩く親子を見るのもかわいそうであった。雨の日も風の日も行軍ばかりで、着いたところが多分牡丹江郊外の日本軍の火薬庫かと思った。ここで

持ち物はすべてソ連軍に取り上げられてしまった。私は妻子の写真までも取り上げられてしまった。当時食い物もなく空腹ばかりで毎日食物集めに終始した。当地に一か月有余駐屯していたかと思う。

同年十月二十九日牡丹江より貨車に乗せられた。汽車は東進し、十一月三十日ソ連領に入る。ソ連領に入ってしばらくして、汽車は北に向かって走る。十二月一日コムソモリスクから北方森林鉄道に入る。汽車はしばらく北東に走る。汽車はとまる。鉄道は行きどまり。見れば、一面森林と真っ白の雪一面、ここで下車命令がくだる。鉄道沿線で防寒服、防寒帽、防寒靴等支給される。これで日本に帰ることは不可能なることを思う。

雪の中一列で歩く。夜中まで歩いて着いたところが大きな倉庫のような建物で、食事も与えられず一夜を過ごす。翌朝になって一面雪の広場に幌を掛けたトラックが何十台となくあった。このトラックに三十人ずつ乗せられ、ソ連兵二人同乗監視のもとに、どこへ行くのか雪の道を走り続ける。トラックには幌が掛けてあるため、山か野原か森林か、東西南北何もわからず、トラックは一

日中走り続ける。車の上では皆無言のままだった。夕方になってやっと車がとまった。約一昼夜食事も与えられず、空腹は増すばかり。暗くなって下車、付近は一面森林と雪ばかり。林の中に点々と幕舎が建っていた。人が住んでいる様子であった。あとでわかったが、これがドイツの捕虜であった。一夜は幕舎の中で折り重なって寝た。一夜明けて舎外に出たときは一面雪と森林ばかりだった。雪は五十センチくらいあった。昨夜いたドイツ人は一人もいなかった。朝食にソ連の黒パンとスープ少々が与えられた。朝食後、早速仕事であった。木材の伐採作業に出る者、道路工事に出る者、いよいよ捕虜の生活が始まった。

今日は木材の伐採かと思うと、切った木材の運搬、翌日はまた道路工事と仕事は毎日一定ではない。かなり寒く防寒服をつけての作業はなかなか苦痛であった。食事は朝は黒パン一片百五十グラム、スープ半ポンドのミルク缶に八分目、昼と夜は雑穀のおじやで空腹をしのぐ程度の食事で、寒さと空腹の毎日だった。道路工事をして、防寒服を着て防寒手袋ではツルハシが三回と上げら

れなかった。寒さは十二月というのに零下三十五度、毎日のように雪はチラチラ降り続く、でもあまり積らなかった。当地に来てから十数日が過ぎたある朝、点呼に数人の人が不在のため、各幕舎を見て回ったら皆死んでいた。寒さと空腹のためだったと思う。現在地がどこかわからなかったが、かなりの北の方にいることはわかった。日が過ぐるに従って幕舎は次々に建設されて、板の間に寝られるようになった。でも三・三平方メートルに八人寝かされた。幕舎は一個当たり三十人ずつであった。一か月も過ぎたころ、百人ばかり死んでいた。仕事は毎日々々で、一週間に一日も、一時間も休みはなかった。一月の終わりにころには雪は毎日降り続き、食糧も思うように与えられず、労働はますます激しくなり、望郷の念は日に増して強くなってきた。零下三十余度の寒さの中で一番苦しかったことは、凍りついた便所の掃除だった。

二月中旬ころより丸太を積み上げた宿舍の建設が始まった。毎日木材の伐採ばかり、原木伐採は一番重労働であった。食事は少なく毎日腹いっぱい食べたい、家

へ帰りたいが心の日課だった。二十一年四月ころには丸太建築が出来上がったが、これはすべてソ連の宿舎だった。道路工事、木材の伐採搬出が毎日の仕事だった。疲労と空腹と栄養失調で毎日死んでいく者が増し、四月の終わりころには千人の大隊も七百人になってしまった。

五月初め、私は不幸にして木材搬出中怪我をして入院することになった。私は足の骨折であった。同僚と別れ病院へ行った。病院といっても丸太を積み上げたお粗末な建物であった。医者は、病院に一人男の医者があり、他はすべて女医ばかりであった。私は幸い入院患者の中に外科医（日本の医者）がいて診察していただいたので、約三か月で退院、また別の収容所にはいり、翌日からまた道路工事、木材の搬出と毎日激しい仕事ばかりであった。昨年（二十年八月）初めに入浴して以来、まだ入浴したことがない。抑留生活では風呂はなく一週間に一回少々のお湯で顔を洗い、その後で体をふく程度であった。八月の終わりころより鉄道工事に約三か月従事する。このころになると日常の会話もできるようになった。

昭和二十一年の中ごろよりおの自分の仕事をするようになり、仕事もノルマ式になり、なお、体にも等級がつくようになった。一級から四級まであって、一、二級は重労働、三級は軽労働、四級は休養で、食事は一、二級は四百五十グラム、三級は二百五十グラム、四級は百五十グラムであった。私は木材伐採が得手で、十一月ごろから原木の伐採及び製材所の仕事に従事した。作業には監督がいて、我々の仕事の監督はソ連の囚人であった。その上ソ連の軍法会議にかかったソ連の軍人、その上にソ連の正規軍人がいた。日本の捕虜はすべてソ連の内務省管轄であったようである。仕事はノルマ式で一日の労働時間は八時間であったが、収容所長の権限で二時間の業間作業が毎日のようにあった。休日は週半日であった。結局一か月二日の休みであった。二十一年の十一月ころより二十二年の六月ころまで原木伐採、製材製品の整理等の作業であった。製品は主に鉄道の枕木であった。私の体は割合丈夫で、二年間で体が二級になったのは二か月のみであった。

仕事の中で一番つらかったことは、製材の製品中枕木

の積み上げであった。ノルマ一人一日百五十本であった。ノルマ完了できないときは減食であった。

二十二年六月ころ収容所が変わり、ウオロシロフ郊外の収容所に入った。ここでは農業と大工仕事の手伝いであった。農業といってもジャガイモ畑の除草が主であった。食事が与えられず、一日中夜まで畑の除草をして、空腹で生のジャガイモを食べた。七月ころからは毎晩二時間マルクス主義の講義を強制的に聴講させられた。指導者はすべて朝鮮人だった。思えば昭和二十年六月在満の朝鮮人が日本軍隊に召集されたが、終戦と同時に我々とともに捕虜になった者ばかりであった。大工仕事は日本人捕虜の本職の大工さんの手もとであった。八月ころから時々ソ連の政治部員との懇談会があって、我々はただ日本に帰れることばかり主張した。昼は仕事、夜は共產党の講義と、ただ帰りたいのみ毎晩講義に出た。

二十二年十一月下旬突然移動の命令が出て、汽車に乗せられ着いたところがナホトカであった。いよいよ日本へ帰れるかと思った。しかしここでも毎日朝から晩まで共產党の講義ばかり、大きな講堂の正面には、日本の野

坂参三、徳田球一両氏の写真があり、礼拝させられた。私はナホトカの三日目に病院の当番になった。病院で勤務中、ソ連兵の時計がなくなつて私に疑いがかけられ、盗人として取り調べられた。このときはこれで一生日本へは帰れないと思い、何とも言い尽くせぬ苦しい思いをした。このとき幸いに軍医で日本語の上手な人がいて、いろいろと調べた結果、疑いが晴れて帰してもらった。宿舎に帰ったときは皆乗船のため整理していた。

二十二年十一月二十九日朝ナホトカ出発、夕方雪の降るなか乗船、ずぶぬれのまま貨物船に乗った。

これでいよいよ日本に帰れると思つたら皆がただ泣くばかりであった。二年間食べたいのと帰りたいと思つたことが現実になったこの喜びは何ものにもかえがたく、ただただ出るものは涙ばかりであった。丸二年間食事が十分に与えられないので、夏は草木の芽、ヘビ、カエル、サワガニ等を食べ空腹を満たしたが、冬が一番困つた。思えば二年間、命があつたらいつの日か家に帰れることを信じて、体のみ大切にして過ごしてきたが、現実になつてみるとただ胸がいっぱいであった。

二十年八月以来初めて白米の飯が与えられたうれしさ、経験した者のみ味あうことができる。

昭和二十二年十二月五日解放され、同月七日、五年ぶり我が家に着く。

ああ敦化まで二百九十里

兵庫県 浅田 謙治

昭和二十年八月九日の早朝、わが斐徳第九遊撃隊（東安の次の駅）に非常呼集のラッパが鳴り響いた。飛び起きて一瞬演習かなと思つたくらい当時日ソ間に緊迫感などなかったと思う。週番士官がバタバタと出かけたので、これは本物だと思った。

急いで身仕度、靴下、軍靴、巻脚絆まず足元から装束する。いつ敵がちん入してきても足元さえ身仕度しておけば、すぐ戦えるせいである、はだしでは戦えない。しかしそのとき履いた軍靴をまさか三か月後の十一月十六日、入ソ途中のイルクーツクのシャワー浴場で脱ぐ運命

だったなどとは神ならぬ身の知る由もなかった。

ほどなく週番士官が飛んで帰って来た。ソ連国境よりソ連軍が国境突破侵入中である。我が第九遊撃退は直ちに国境方面に出動する。速やかに準備して待期、ただし第四小隊は鉄橋守備のため、軽軍装にて直ちに出動せよである。朝食も食わず早朝から振り回されどおし、兵たちが気の毒である。帰投後朝食、この朝食が軍隊生活最後の整然とした朝食になろうとは。朝食後身辺整理、手箱の中に私の愛聴したレコード十枚ほど、フランスのアレクサンダー楽団の演奏した日本の曲、古賀政男作曲の「サーカスの唄」「ほんとにそうなら」等の名曲ばかり、私の分身の一部であった。

第二次大戦でドイツがフランスに攻め込んだ際あのヒットラーがアレクサンダーダンス管弦楽団員を保護せよと全軍に命じたことは有名な話である。戦争に行くのにレコードを携帯してゆくわけにもいかず、全く残念至極であったが手箱に納めて、どうか心ある満人に拾われてくれと祈る思いであった。そのレコードとの別れがのちのち入ソ後私の人生に、音楽との関係が生まれた第一